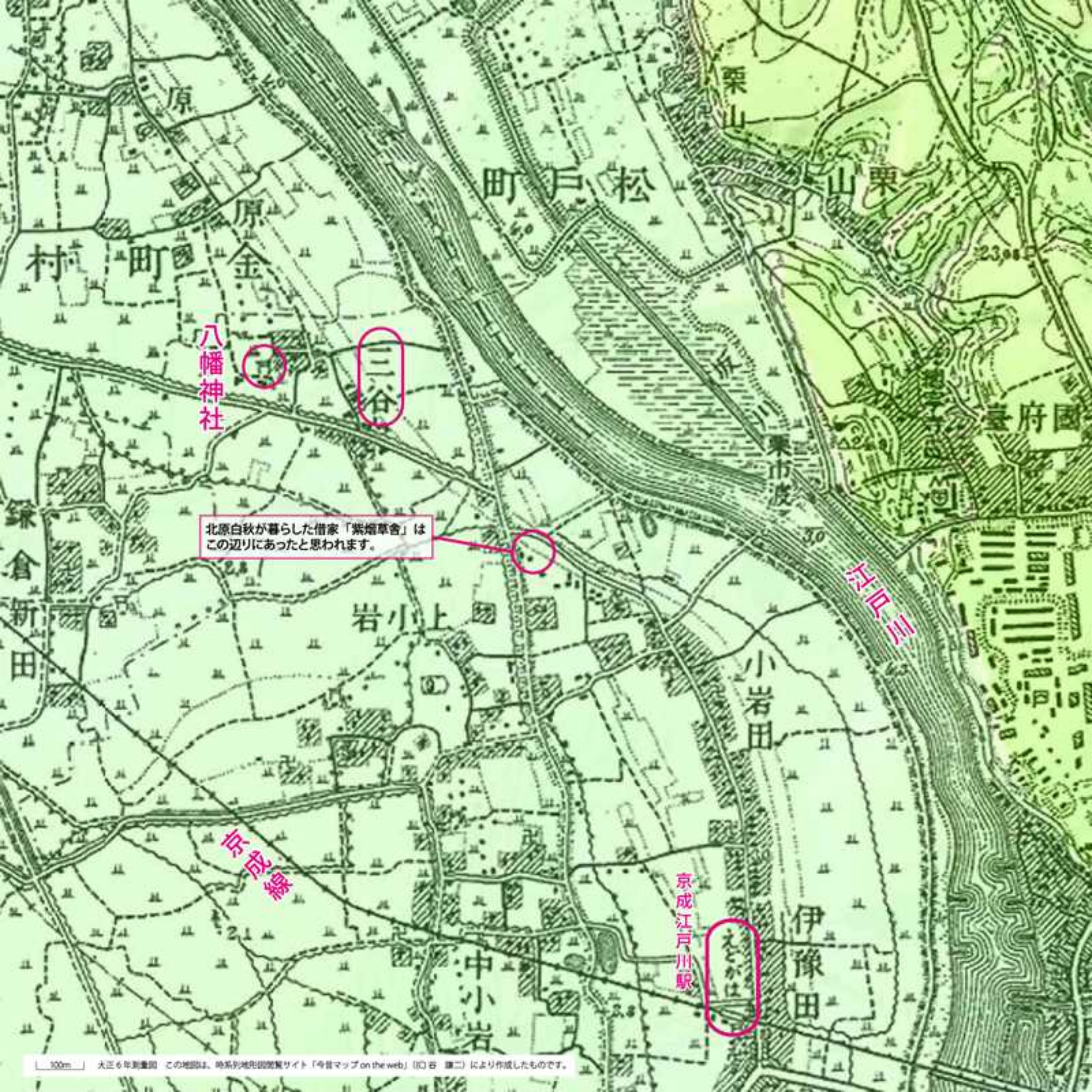


北原白秋の生涯

和暦	西暦	年齢	出来事	作品関連	社会情勢
明治18	1885	0	1月25日 福岡県山門郡沖端村（現・柳川市）に、父・長太郎と母・しけの長男として誕生。陸吉と命名される。		内閣制度発足 初代総理大臣に伊藤博文就任
明治20	1887	2	チフスにかかり看病した乳母シカ死去。		
明治24	1891	6	矢留尋常小学校（4年制）に入学。		
明治27	1894	9			日清戦争開戦
明治28	1895	10	柳河高等小学校（4年制）に入学。		
明治30	1897	12	伝習館中学校（5年制）に2年飛び級で入学。		
明治32	1899	14	進級試験で数学の1科目のみ不合格。留年し文学に熱中。		
明治33	1900	15	島崎藤村『若菜集』や雑誌『文庫』『明星』を受読し「福岡日日新聞」に短歌を投稿し始める。		
明治34	1901	16	沖端の大火で生家の大半が焼失。家運傾く。	友人との回覧雑誌「蓬文」で白秋の雅号使用。	
明治35	1902	17	文学に熱中し父と対立。神経衰弱で休学。	短歌が「福岡日日新聞」「文庫」に入選。	
明治36	1903	18	中学5年に復学。		
明治37	1904	19	親友・中島白雨（鎮夫）が自殺しショックを受ける。 中学の卒業試験で数学教師と争い中退。父に無断で上京。 早稲田大学高等予科に入学。	長篇詩「林下の黙想」が「文庫」に入選。	日露戦争開戦
明治38	1905	20	早大予科中退。早大大学部聴講生となる。	「早稲田学報」誌に「全都覚醒賦」が第一等に入選し「文庫」にも掲載。	
明治39	1906	21	与謝野鉄幹の誘いで新詩社に加入。「明星」の同人となる。		
明治40	1907	22	与謝野鉄幹、木下杢太郎、平野万里、吉井勇を郷里に招き、平戸・長崎を旅行。南室文学に関心を持つ。	無署名でリレー式に送った紀行文「五足の靴—五人づれ」が東京二六新聞で掲載される。	小学校令改正（小学校6年制）
明治41	1908	23	山本鼎（かなえ）らと<パンの会>結成。	「新思潮」「中央公論」「新声」など詩を寄稿。文壇での地位を確立する。	
明治42	1909	24	実家が破産し年末一時帰郷。	森鷗外を中心とした雑誌「スバル」創刊に参加。詩集「都京門」刊行。	
明治43	1910	25	千駄ヶ谷に転居し、隣家の人妻・松下俊子と知り合い恋愛。		
明治44	1911	26	「文章世界」の明治十大文豪投票で詩人の部第1位に選ばれる。	詩集「思ひ出」刊行。出版記念会が開かれ上田敏らから讃詩が注がれる。 文芸雑誌「朱槿」創刊。	
明治45	1912	27	母と妹が上京し、弟・鉄雄と台東区に居住。松下俊子の夫から森通罪で告訴され拘留、免訴。父も上京し、一家は郷里を捨てる。		明治天皇崩御
大正2	1913	28	俊子と正式に結婚し、一家で現・三浦市三崎町に転居。 父と弟が商売に失敗し、東京に帰り、白秋夫婦のみ三崎に残る。	短歌集「桐の花」刊行。詩集「東京景物詩及其他」刊行。 「城ヶ崎の雨」を作词。	
大正3	1914	29	妻・俊子の結核療養のため小笠原父島に転居するも4ヶ月で帰京、離婚。	詩歌結社として興した逓礼詩社より詩歌雑誌「地上逓礼」創刊。	第一次世界大戦開戦
大正4	1915	30	弟・鉄雄と阿蘭陀書房を設立。	阿蘭陀書房より「ARS」創刊。短歌集「雲母集」刊行。	
大正5	1916	31	5月、江口章子と結婚。現・千葉県市川市の亀井院内に居住。 6月、東京府南島村小笠原村、現・江戸川区北小笠原に転居。 詩歌結社「逓礼詩社」を「紫煙草舎」に改める。	詩文集「白秋小品」刊行。詩歌雑誌「烟草の花」を創刊。 11月号、12月号の2号で廃刊。	
大正6	1917	32	現・文京区に転居。弟・鉄雄が出版社アルスを設立する。		ロシア革命勃発
大正7	1918	33	現・小田原市に転居。	雑誌「赤い鳥」創刊に伴い、童謡を寄稿し、投稿童謡の選評を担当する。 雑誌「大観」に随筆「雀の生活」連載。	
大正8	1919	34	伝蔵寺の竹林に木兎の家と書斎の方丈を建てる。	「中央公論」で「葛飾文章」発表他、「雄弁」「新潮」に執筆。 第一童謡集「とんぼの眼玉」刊行。	
大正9	1920	35	木兎の家の隣に3階建ての洋館を建設。 地鎮祭の日には妻・章子が家出し、まもなく離婚。	詩文集「雀の生活」、「白秋詩集」第一巻刊行。	国際連盟設立
大正10	1921	36	佐藤菊子と再婚。	「白秋詩集」第二巻、童謡集「兎の電報」、詩文集「童心」、 短歌集「雀の卵」、翻訳童謡集「まごあ・ぐうす」刊行。	
大正11	1922	37	長男・陸太郎誕生。	氏誌集「日本の笛」、童謡集「祭の笛」刊行。山田耕柝と「詩と音楽」創刊。	
大正12	1923	38	関東大震災で小田原の住居が半壊。	詩集「水墨集」、童謡集「花咲きさん」刊行。	関東大震災
大正14	1925	40	長女・夏子誕生。北海道・樺太を旅行。	童謡集「子供の村」刊行。	普通選挙法公布
大正15	1926	41	小田原を引き払い、谷中に転居。	童謡集「二重虹」、「泉の子」刊行。「近代風景」創刊。	大正天皇崩御
昭和3	1928	43	大阪朝日新聞社の企画で旅客機で福岡〜大阪間を芸術飛行。 20年ぶりに妻子を伴い柳川へ帰京。		
昭和5	1930	45	南満州鉄道の招きで満蒙旅行。	編著「赤い鳥童謡集」刊行。	
昭和9	1934	49	台湾総督府の招きで台湾を旅行。	「白秋全集」完結。短歌集「白南風」刊行。	
昭和10	1935	50	大阪毎日新聞社の依頼で朝鮮を旅行。 山田耕柝の発起で生誕50年を記念し「白秋を歌う夕」を開催。	多磨短歌会を結成し、歌誌「多磨」創刊。	
昭和11	1936	51	奈良で多磨全国大会開催。「赤い鳥」終刊号に鈴木三重吉の追悼詩などを寄稿。	国民歌謡集「躍進日本の歌」刊行。	
昭和12	1937	52	視力に異常を感じ、糖尿病による腎臓炎と眼底出血で入院。		盧溝橋事件
昭和13	1938	53	退院するも視力は回復せず口述筆記で執筆継続。		
昭和16	1941	56	芸術院会員に推される。城ヶ島に疎建立。病状悪化。	「白秋詩歌集」第一巻刊行。「満蒙東征」が福岡日日新聞文化賞受賞。	太平洋戦争開戦
昭和17	1942	57	病状悪化も創作意欲盛ん。11月2日永眠。勲四等の叙される。	歌論集「短歌の書」他、詩集や童謡集を精力的に刊行。	



八幡神社

三谷

北原白秋が暮らした借家「紫壇草舎」はこの辺りにあったと思われます。

○

岩小上

小岩田

利根川

京成線

京成江戸川駅

えどがは

伊豫田

中小岩

葛飾小品

私どもの朝飯の済むまで、子供達は椽側の泰山木の下に集まり、誰はじむるとなく、相互に可憐な両掌を開いて、それらをうち合してゐた。一人の子の掌は雪のやうに白い。観てゐると、非常にかはいい。(中略)一寸お待ち、いいものを描いてあげるから。

私が硯や筆を取りそろへて、引き帰してくるまで、その子は、大人しく元のところ待ってゐた。私はその子の小さな掌を開かせてそこに朱であかい金魚をひとつ描いた。たつた一匹。

眼を円くして周囲から見えてゐた外の子供達も一斉に歓呼の声を挙げた。無心な子供達！(中略)子供達は一人一人に私の前にその両掌を開いた。

「堂」より



「葛飾小品」は、「自然全集15」(学芸書)に収録されています。文字表記を凡字に、文意を尊重し、原文に準じています。

葛飾小品

いい住居だ。私の思った通りだ。私はけふ一日泥足の儘で地面をべたべた歩き廻った。いたるところ青田と蓮田続きである。(中略)

朝早く起きて、井戸端で、紫のあやめを見ながら顔を洗つてると、まだ露にぬれた田舎の一本道を、郵便脚夫が手を振って来る。午ちかくなると豆腐屋も通れば、時折には、柴又さしてダリヤや紫陽花をいっぱい載せた花屋の車も前の土手を通つてゆく。江戸川べりの河舟にゆけば新らしいピンピンする鯉や鯰が買へる。肉類その他は市川迄十二三丁行かねば無いが、鐘詰で済ませば済む。野菜はそこら中の畑から真青の奴をもぎてくれる。東京には近い。住み馴れて見たら、さほど不便も感じまい。不便でもいい。私はこの地面にびったり合つた生活がしたい。百姓達に交つて、生れた儘な明けっ放しの素朴な、みづみづしい、真実の人間らしい生活がして見たい。私はこれから愈素っ裸だ。

「葛飾から伊太利へ」より

「葛飾小品」は、『全集全巻15』（前掲書第15）に掲載されています。文字起こし及びルビについては本文を参照し、本文に準じています。



白秋 小岩つれづれ

「私は再び土手^{どて}へ上つて、三谷^{さんや}の方を振りかへつた。おお広々^{ひろ}とした葛飾^{けし}の野、見える限りの青田には鵠^この鳥のやうに百姓^{ひやくしやう}が留^{とど}つてゐる。大きな紅い太陽が西の空に廻^{まは}りはじめると、その点々^{てん}は火のやうに耀^{かがや}き、風はわたる。もう日暮^{ひぐれ}に間もあるまい。(中略)ああ、その親^{した}しい風景の中に私に一番近く、柳が枝垂れ、ほそぼそと紫の煙を立てはじめた草葺^{くさむき}の家、あれこそ私の家^{うち}ではないか、妻^{つま}がもう夕餐^{ゆうげ}の煙を立ててゐる。私はたまらなくなつて茄子やもろこしの間を駈^かけ抜^ぬけた。紫の煙！ 紫の煙！ 私は私達のこの畑の中の新居を、その晩、紫烟草舎と名をつけた。」

『葛飾小品』^{第2}より

小岩に暮らしはじめた頃の随筆です。

※1 南葛飾郡小岩村三谷Ⅱ現在の北小岩8丁目付近

※2 『葛飾小品』は、大正5(1916)年に阿蘭陀書房より白秋最初の詩文集としてまとめられた『白秋小品』にて発表された散文です。定価1円。

文字表記およびルビについては原文を尊重し、原文に準じています。

白秋 小岩つれづれ

「小岩村の小岩田の三谷、そこにたつたひとつ赤い郵便函の下つた家、前は柴又と千住の別れ道、石の地藏が一体立ってすぐ下手に橋がある、これが矢張り地藏橋。橋の横手のこの草葺の家を遠くから見ると、南に柳が枝垂れて風情がいい。店にはラムネや果物や雑貨品が並んで、上り框には腰掛けた村の若い衆たちが烟草でも喫むでみると、外庭には無くてはならぬやうにちやんと掘ぬき井戸がある。井戸には水がなみなみと溢れて、溢れた水が板張の流しに周囲からこぼれてゐる。その傍に紫の花あやめが詔向に咲いてゐて上に粗末な竹棚がある。まるで光琳模様そのままだ。その家を前の日河を渡つて見に来た時の嬉しさつたら。」

『葛飾小品』より

小岩の住まいを初めて見聞した時の随筆です。

※『葛飾小品』は、大正五（一九一六）年に阿蘭陀書房より白秋最初の詩文集としてまとめられた『白秋小品』にて発表された数文です。定価一円。

文字表記およびルビについては原文を尊重し、原文に準じています。

白秋 小岩つれづれ

「私の葛飾^{※1}の生活は、もとより簡素を旨としましたので、猶更
雀によく似たその日その日を見送りましたが、誰でも本当に雀
の声に聴き入った時には、その時だけでも俗念を離れて清々^{すがすが}と
なります。さういふ尊い瞬間は無論誰人にでも必要なのです。
〈中略〉雀ばかり毎日観て暮らしてゐた葛飾の生活から離れて、
喧騒な都会の人となつた時、いつも思ひ出さるるのは葛飾の雀
でした。」

『雀の生活』^{※2}より

小岩時代の暮らしをつづった随筆です。

※1 南葛飾郡小岩村三谷Ⅱ現在の北小岩8丁目付近

※2 『雀の生活』は大正9（1920）年新潮社より刊行されました。定価1円60銭。

『白秋全集15』財団法人 昭和60（1985）年より出版。
文字表記およびルビについては原文を尊重し、原文に準じています。

雨の小径

しとしとと降り続く雨も、白秋の手にかかると
実にバラエティ豊かな作品に生まれ変わります。
子ども好きであった白秋の鋭い観察眼や想像力から生み出された、
楽しい雨、寂しい雨。雨のある日の一頁が鮮やかに映し出されます。

アメフリ

作詞：北原白秋 作曲：中山雪子

アメアメ、フシフシ、カタヤシノ
ジヤノメ、ヂオムカタ、ウレシイナ。
ピツ子ピツ子 チヤツプチヤツプ ランランラン。



カヤマシヨ カバンヲカタヤシノ
オトカラ ユフユフ カヤガナル。
ピツ子ピツ子 チヤツプチヤツプ ランランラン。

ウラウラ、オノコハズブツレダ、
ヤナギノヤカタヂ、チヤチヤル。
ピツ子ピツ子 チヤツプチヤツプ ランランラン。

カタヤシノ、ボウノヲカシマシヨカ。
キミキミ、コノカタヤシタマエ。
ピツ子ピツ子 チヤツプチヤツプ ランランラン。



ボウナラ、イイシダ、カタヤシノ
オオキナ、ジヤノメニハイツテウ。
ピツ子ピツ子 チヤツプチヤツプ ランランラン。

いっしょに歌ってみよう♪

雨:



城ヶ島の雨:



ピツ子



「コドモノクニ」に発表された歌詞は、最初すべてカタカナで表記されていました。お母さんのお迎えを待つ子どもの気持ちが変わるようになされた歌詞の多い作品です。「ピツ子ピツ子」と続く明るい調子が雨の音を楽しく感じさせてくれます。未刊集「赤いブイ」に収録。初出は大正14(1925)年11月号の「コドモノクニ」。

※「ピツ子」は「雨」の音。

※「ピツ子」は「雨」の音。

からたちの小径

白秋の作品には、花や木や自然があふれています。「からたちの花」をはじめ、童謡には「たんぽぽ」「げんげ草」「曼珠沙華」と

さまざまな草花が咲き誇っています。レンコンの産地であった小岩時代を懐かしんで書いた「蓮の花」という童謡があり、散文も残っています。

からたちの花

の詞・北原白秋

作詩・山田耕筈

からたちの花が咲いたよ。
白い花が咲いたよ。



からたちの花を呼ばいたよ。
白い花を呼ばいたよ。

からたち畑の道程よ。
いつもいつもおる道だよ。



からたちの秋の道程よ。
もういまは金のたまごだよ。

からたちの花を呼ばいたよ。

みんなみんなやましかったよ。

からたちの花が咲いたよ。
白い花が咲いたよ。



いっしょに歌ってみよう♪



ミカン畑のからたちは、青く太いトゲがあり昔からよく生垣に利用されてきました。藤川の生家近くの生垣で、白秋も昔には白い五弁花を、後には丸い實をよく目にしていました。すべての行末を「よ」で結ぶ韻を踏む技法が印象的な作品です。童謡集「子供の村」に収録。初出は大正13（1924）年7月号の「あひる」で「月と頭道」にも掲載。やっくり畑裏に語りかけるような曲は山田耕筈によるもの。

※「あひる」は雑誌名です。

すずめの小径

白秋のたくさんある鳥の歌の中でも、群を抜いて数が多いのが雀の歌。

小岩での貧しい暮らしに彩りを添えた雀を主役に、

白秋は「雀のお宿」をはじめ「雀よ」「すずめといっしょに」「かぜひき雀」

「雀の頭巾」「舌切雀」などを作詞しています。

雀のお宿

作詞：元稹白秋

作曲：弘田鶴太郎

昔、小径、小径のなかで、

ちゅうちゅうぽたぽた、雀の機織。

彼方であんとん、

此方であんとん、

やれやれ、いそがし、日ががずる。

ちゅうちゅうぽたぽた、ちゅうぽたり。



雀、雀、雀の子らは、

ちゅうちゅうぽたぽた、その後むらゐ。

上へ行ったり、

下へ行ったり、

やれやれ、いそがし、日がつまる。

ちゅうちゅうぽたぽた、ちゅうぽたり。

青鷲、茶鷲、茶鷲のおへへ、

ちゅうちゅうぽたぽた、何反織れたか。

朝から一反、

昼から一反、

やれやれいそがし、日が暮れる。

ちゅうちゅうぽたぽた、ちゅうぽたり。



いっしょに歌ってみよう♪



赤い鳥
小鳥



ちんちん
千鳥



砂山



揺籠の
うた

昔歌「舌切雀」を題材に、真鍮に入れる土産の反物を雀たちが一生懸命に織っている様子をリズミカルに表現した童謡です。童謡集「どんぼの歌玉」に収録、初出は大正8(1919)年5月19日付の「大衆朝日新聞」。弘田鶴太郎のほか、成田為三などの作曲があります。

※「雀」は鳥類学上の分類でなく、歌の中で使われている鳥の総称です。

かつて白秋が暮らした町

田・南葛飾郡小岩村三谷
現・北小岩8丁目

木漏れ日あふれる現在の姿

親水さくらかいどう



北葛飾郡新大塚駅から江戸川河川敷まで約500m。歴史的地域を散策しながら親水さくらかいどうです。桜色の花びらがある道から水路とともに伸びる道には桜並木が続き、夏になると涼しい水音を伴って流れます。

上小岩親水緑道



京成小岩駅近くから江戸川河川敷まで約500m。小岩地域の中央を流れる北小岩川のすぐそばに整備された緑道です。平成3(1991)年に作られた緑道緑道です。周辺では明治時代後期から古墳時代にかけての史跡が見つかっており、歴史を彩る展示板や石碑も設置しています。



甲和亭 ⑤

区民の新たな憩いの場として昭和56(1981)年に開設された純日本建築数寄屋造りの区民施設です。華道や俳句、箏や詩吟の練習や発表会他、各種会合や宴会にも使われています。また施設の入口には白秋の歌碑が立ち、白秋の命日である11月2日頃には、毎年北原白秋を偲ぶ朗読会が開催されています。
□北小岩6-43(小岩公園内)

「河土手に螢の奥ひすずろなれど
朝間はさびし月見草の花」



「夏浅み朝草刈りの童らが
素足にからむ犬胡麻の花」

八幡神社 ④

菅田別尊がまつられている旧小岩村の鎮守様です。創建は不明ですが、元禄8(1695)年の記録には神社の名前が見られます。白秋も訪れたに違いないこの神社では、地元の人々によって昭和36(1962)年に建てられた歌碑をご覧ください。
□北小岩8-23-19



昭和14(1939)年の八幡神社。



現在の八幡神社。



「いつしかに夏のあはれとなりけり
乾草小屋の桃色の月」

八幡神社の境内に立つ白秋の歌碑。



境内のお堂には、三谷村として祀られている地蔵尊がまつられています。歴史的なために建てられた石造りのこのお堂は、明治16(1883)年の銘を持つ、区内最古の境内堂です。

南葛飾郡小岩村三谷=現在の北小岩8丁目付近



注：①②③の地点は、古い資料に基づいて推定した地点です。



タナ・田中雑貨店 ②

白秋さんが通った！ 近所の雑貨屋、タナの思ひ出話

「芸術家で、しかも一番貧しかった時代でしょう。子カラスを飼っていたというのも妙だし、三谷（現在の北小岩8丁目界限）の人たちは白秋さんを“変わり者”と思っていたようです。私の姑のはまさんは白秋さんに煙草をよく売ったと話してくれました。“タナ”という屋号で呼ばれた店は昭和42年頃までやっていました。当時は尋ねてくるファンが結構いらしてね。私は聞きかじった話をしてさしあげました。お嫁に来た頃、この辺りは田んぼばかりの田舎でね。おばあちゃんたちから念仏講を教わったり、お地蔵さんの世話をしたり。点々と並ぶ家々のつきあいは濃く、信心深い長閑な場所でしたよ」。

——タナのご子孫、田中好子さん ※「タナ」とはお店の愛称



地元の民衆の集いの場になっていたというタナ。写真は昭和40（1965）年頃のものです。写真：田中好子さん所蔵



毎日お参りされているお地蔵様の前で古い白旗を掲げてくれたタナのご子孫、田中好子さん。この地蔵菩薩立像は、明治5（1872）年頃に奉納する民衆のための道標でした。立像：3（1753）年建立の石の愛蔵有形文化財です。



江戸川の改修前。昭和40年頃の三谷界隈の風景です。写真：田中好子さん所蔵



紫煙草舎（しえんそうしゃ） ①

紫の煙が立ちのぼる情緒豊かな様子から、紫煙草舎と名付けられた小岩の家は、乾草商を営む大家さんの離れでした。床の間や違い棚がある8畳間と6畳間の他に台所もついた借家の家賃は5円。大家さんが千駄木の先生、森鷗外に似ていたことも引越しを即決する一因になったようです。当時すでに有名でありながら暮らしはどん底だった白秋は、村人や子どもたちに癒され作品を創作。その暮らしから紡ぎだされた言の葉は、『雀の生活』『白秋小唄集』『雀の卵』などに収められています。



ありし日の紫煙草舎



地蔵橋 ③

「前は柴又と千住の別れ道、石の地蔵が一体立ってすぐ下手に橋がある、これが矢張り地蔵橋」。「葛飾小品」の一文に描かれた地蔵橋が、写真の橋です。改修工事でなくなるまで、三谷の村人が往来し、記念写真を撮った、地元のランドマークでした。



ある家族の記念写真。写真：田中好子さん所蔵



八幡神社に寄贈された、三谷の村人が作成した古地図です。白秋の住居や地蔵橋がもともとあった場所もはっきり記されています。



谷崎潤一郎は古井翁、後田孝雄であるが、紫煙草舎に暮らす白秋を訪ね、柴又の川島村孝内（かゝじん）へ譲り出したと記す『時人のわかれ』に書かれている。紫煙草舎への移住前であったこの書は江戸時代には、その他にも白秋を訪ねる文人の証書が通ったことだろう。



小岩時代に発行した詩歌雑誌『雀の生活』は、白秋を中心とした同人誌のようなものでした。第1号は、第17号で廃刊された。この雑誌は2号で発行。『雀の生活』から『紫煙草舎』と改題された。発行元の詩歌雑誌もその後継者になった。

白秋のあしあと 激動期

24歳

明治42(1909)年

『邪宗門』発表

24歳の時に第一詩集『邪宗門』を星風社より刊行。この詩集は大好評を得て、詩人としての地位を確立する礎になりました。2年後には東雲堂書店より第二詩集『思の出』を出版。盛大な出版記念会が開かれ、評論家らから絶賛されました。



この詩集は、白秋の詩才の早熟さを示すもので、その後の詩壇に大きな影響を与えました。特に『思の出』は、白秋の代表作の一つとして知られています。



この詩集は、白秋の詩才の早熟さを示すもので、その後の詩壇に大きな影響を与えました。特に『思の出』は、白秋の代表作の一つとして知られています。

27歳

大正元(1912)年

人生最大の事件!

明治34(1901)年の沖城の大火で実家を焼失。衰退のきざしが見え始めた実家が、ついに破産。仕送りで生活していた白秋は生活に窮し、さらに桐の花事件と呼ばれる恋愛スキャンダルにより27歳の時に投獄され、文壇での名声を一挙に失います。



白鳥 鶴太郎 (1886-1961)

<明治35(1902)年-大正11(1922)年>
書道で名を馳せ、小説『鶴太郎』や戯作『鶴太郎』を発表した明治・大正の文壇。鶴太郎は、白秋の詩壇デビューのきっかけとなった。



田村 幸次郎 (1886-1961)

<明治35(1902)年-昭和65(1990)年>
福岡出身の歌人。白秋、上原と組んで『三羽鳥』を創刊し、白秋の詩壇デビューのきっかけとなった。



山本 西 (1886-1961)

<明治35(1902)年-昭和23(1948)年>
白鳥、鶴太郎、田村と組んで『三羽鳥』を創刊し、白秋の詩壇デビューのきっかけとなった。

29歳

大正3(1914)年

南国小笠原へ

恋愛事件をきっかけに父を含む一家で三浦三崎に転居。名作『城ヶ島の雨』を作詞します。スキャンダルの末結婚した一番目の妻・俊子の療養を目的に、その後通々小笠原諸島の父島へ渡るも上手くいかず帰京。妻は家族とそりが合わず結局、離婚してしまいます。

この事件は、白秋の人生に大きな転機となりました。



31歳

大正5(1916)年

小岩で極貧の創作活動!

2度目の結婚をし、千葉県市川市の亀井院に居住。1ヶ月ほどで江戸川沿岸の小岩に引越す。妻・幸子と静かな田舎の中で創作活動を続けます。「米桶に粟のかすがに音するほ白玉のこほりがながけり」「雀の卵」〜『鶯節問答集』ととうとう買しくとも心豊かな日々でした。



『鶯節問答集』



高橋 貞二 (1886-1961)

<明治35(1902)年-昭和17(1942)年>
日本正統派の文壇で活躍した歌人。白秋の詩壇デビューのきっかけとなった。



石川 幸次郎 (1886-1961)

<明治35(1902)年-昭和23(1948)年>
白鳥、鶴太郎、田村と組んで『三羽鳥』を創刊し、白秋の詩壇デビューのきっかけとなった。

高橋貞二『鶯節問答集』(昭和17)の挿絵「白鳥」で、詩人としての白秋が描かれた。高橋貞二が白秋の詩壇デビューのきっかけとなった。



谷崎 潤一郎 (1894-1958)

<明治35(1902)年-昭和44(1969)年>
『鍵』や『痴人の恋』などの小説で知られる小説家。白秋の詩壇デビューのきっかけとなった。



高橋貞二と白秋の挿絵「白鳥」

白秋のあしあと **成長期**

0歳

明治18(1885)年1月25日誕生

トンカ・ジョン

福岡県朝川の老舗問屋に生まれた北原白秋は、幼い頃からトンカ・ジョンと呼ばれ大切に育てられました。トンカ・ジョンとは、この地方の方で「良家のお坊ちゃん」という意味。本名は隆吉でした。



「朝川本店」は、現在でも旧態を重んじ古道具を多く取り扱う。常盤町・湯島町の一角、常盤町・湯島町の一角に位置しています。
資料提供：朝川本店(1)



白秋の幼少像(1904年・1905年)



「朝川本店」は、現在でも旧態を重んじ古道具を多く取り扱う。常盤町・湯島町の一角、常盤町・湯島町の一角に位置しています。
資料提供：朝川本店(2)



16歳

明治34(1901)年

白秋誕生秘話

本の虫だった隆吉に、「白秋」というペンネームがついたのは中学時代。文学好きの仲間と全員「白」の下に一字を置く雅号をつけようと、「雨」「緯」「葉」「川」「月」「秋」の中からクジで引き当てたのが「秋」でした。



白秋の誕生秘話

「朝川本店」は、現在でも旧態を重んじ古道具を多く取り扱う。常盤町・湯島町の一角、常盤町・湯島町の一角に位置しています。
資料提供：朝川本店(3)

19歳

明治37(1904)年

家出して上京

家業の老舗問屋を離れてほしい父との確執もあり、朝川からこっそり汽車に乗り上京したのは19歳の時。早稲田大学英文科予科に入学すると、「早稲田学報」の発刊で第一等に入選するなど、有望な新進詩人として徐々に注目を集めていきます。



白秋の誕生秘話

「朝川本店」は、現在でも旧態を重んじ古道具を多く取り扱う。常盤町・湯島町の一角、常盤町・湯島町の一角に位置しています。
資料提供：朝川本店(4)

白秋の誕生秘話

22歳

明治40(1907)年

五足の靴

早稲田大学では同級生の若山牧水と意気投合。学外では新詩社に参加し雑誌「明星」の同人になるなど、一流の文学者と活発に交流します。与謝野鉄幹ら5人と九州を旅した「五足の靴」の経験は、南蛮文学に目覚めるきっかけになりました。



白秋の誕生秘話

「朝川本店」は、現在でも旧態を重んじ古道具を多く取り扱う。常盤町・湯島町の一角、常盤町・湯島町の一角に位置しています。
資料提供：朝川本店(5)

白秋の誕生秘話



白秋の誕生秘話



白秋の誕生秘話

「朝川本店」は、現在でも旧態を重んじ古道具を多く取り扱う。常盤町・湯島町の一角、常盤町・湯島町の一角に位置しています。
資料提供：朝川本店(6)

紫煙草舎

白秋と妻の章子は、
現在の北小岩8丁目付近で借りた
小さな家を、「紫煙草舎」と名付けて
暮らしていました。



紫煙草舎にて、白秋と妻・章子と愛犬番路（ゴロ）（写真提供：（公刊）日本近代文学館）